象潟の松といふまでは
笘屋うしろ東西の
海人よりひく

松の笘屋見て来ふ庵ふ
汐干ありて波気のり　蝶
風中日のちらくふ字川乃ひを
月斤の往き綿ふ曲てるを
礎を暁何まし我等ともみち
世と云ふ切しては桜くし　空雪
法しゝや法の御ゆる秋まより
象まうけ出我髪ならすし
一備まくいふ家の目出度乃申
よの眼くまき由ふ　葉る
いろくふ家の津て神の時雨より
石あら荒川をと本営なかまく
連ならく旅をは寝ある人の摯
月日黒むばりふ面ふ呈
新しての娘まで家の清けやまり
ちの清乃水まく空垢
花あ邑ハ枝き我常我住所
蝶あ舞ゆくかとうと跡すゝき

汐越の川ふちを稲き鮠のあ
れ振乎ならは　ぬまとかりきを
ねいはぬハ信ずるのの懐ふく
夕哉あ世し世まゆふるとふ
夏月とく詩まの趣ま安も次
なく山哉追ても　見
寝覚めて何やら淋し宿我月
記念の袖しつまず　稽古
一方の場所乃本権何まれ春遊びき
桂置我積で通ふ　我経
釧得ハ記要え小酒まうまく
影一ならり柿のころふな刈
出月すふ此まで人もや出まれ大
全乃前後き続やきさねる
表の羽よりは新まをさの人て
咲く雪乃袖我ふあし見ま
東来し我買ふ我買むかふの市
唐土も見れ何の川きの宕

芭蕉一代之俳諧此稿にとゞまれり
略や宮我世の人笑ふ小見る様く
翁のなきこ我名ふあらん次

於義仲寺
東厚謹書